

松陰

談話室

第 10 号 1985.11

図書館の特色と読書

図書館長 北 村 文 治

この四月から、前館長の草野正名先生に代って、本学の図書館の仕事をお引受けすることになった。草野教授は専門が図書館学であり、こんどの本学の規定整備委員会にも専門家の立場での将来構想を提示されたが、私もそれを継承し、それを段階的に実現していくために、現行の図書館運営委員会をより活力あるものにしたいと思う。図書館と各学部・学生との関連が、本学の再生・発展を促す現実的視点の一つであると考えられるからである。

本学の図書館の現状は、本学の歴史からみても、やはり文科系の図書が多い。さらに付言すれば、欧米系というよりはむしろ東洋系が圧倒的であると言ってよいであろう。大学の国際学術化が強く要請される今日、本学の図書館もその要請にあれこれ備えねばなるまい。しかし、私は、本学創立いらいの学部編成の形成過程から考えても、図書館の特色として、これまでの“国漢”系中心の伝統を発展させ、現在の学界の水準に対応する専門書を十分にととのえていく姿勢があってもよいのではないかと思う。そのためには、容易に入手しがたい原本・古写本の蒐集につとめることはもちろんである。さらに古文書・古典籍の類はマイク

ロフィルム・複製本等の架蔵を推進していくべきであろう。また個人では所有しがたい叢書類なども可能なかぎり揃えたいものである。

本学の図書館には、まだこれという特色がない。大学としての歴史が浅いからでもあろうが、やはり大学図書館としては個性的な内容をもつべきであろう。

図書館は、言うまでもなく静かに読書し調べ物をするところである。今日の学生すべてに要求することは多少実情にそむくかもしれないが、志ある学生は図書館で早くから読書に親しみ、上記のような原典、あるいは原典に近いものに馴れることが望ましい。今日の学問は多様化ということもよく言われるが、同時に高度の専門化も驚くほどに進んでいるのである。しかも、その専門化には学際的（例えば文科系のなかに理科系の要素が入るというような）傾向も著しい。従って学生は、専門という言葉をおそれずに、すでに教養課程のときから自分の問題・関心を指導教授にぶつけ、その専門的追究に心がけるべきであろう。私は、そういう考え方で、本学の図書館に小人数の読書講座とか原典の常設展示とかを設けるよう運営委員会において検討を重ねていきたいと思う。



新たな友人図書館

法学部法律学科 3年

須賀田 栄子

私にとって図書館は、ごく最近まであまり気にもとめない存在でした。なぜなら今まで教養課程中心の講義であり、講義の時使用していた参考書で充分用事を果たしていたので、わざわざ図書館に行く事を必要としなかったからです。

しかし、今年になって専門分野中心の講義となり、ゼミの講義を本格的に受け始めるようになるにつれて今まで使用していた参考書ではレポートの作成に無理が生じてきたと感じ、その頃から少


しずつ図書館に通うようになりました。今私は3年生ですが来年は4年生ということであり、そろそろ卒業論文の準備にかかる必要があり、最近では本格的に図書館に通わなければならないと思っております。

私は長距離通学者なので時間的制約があり、講義の合い間合い間にしか行けませんが、図書館には、静けさや気持ちを和らげさせてくれる独得な雰囲気があり、参考図書も多くあるのでなるべく足を向ける様にしております。

この様に私にとって、図書館は重要な場所となりつつあります。

最後に私個人としては、より豊富な蔵書や、自然光のさし込む独立した明るい図書館にしてほしいと希望しております。

おい！



図書館の利用価値

政経学部Ⅱ部経済学科 4年

村岡 敏明

図書館は、新聞・雑誌を中心に時事問題を習得するためによく利用しています。新聞は、全国紙すべてあり、雑誌は硬・軟、バラエティーに富んでおり、その時に応じて気軽に読めるため便利です。

私の場合、仕事の関係上、時間に制約があるため休講時に、時には授業を欠席しまとめて読み、時事問題はかなり力がついたと自負しています。

また、仕事が終わリ、同僚が帰る姿を尻目にいやいや学校に行く時や、気分がすぐれない時など図書館のひっそりとした冷たい空気の中に身をおくと気持ちが落ちつき、疲れを吹きとばしてくれます。

最近、専門分野が増え、特にテスト前や、レポート提出の時手持ちの資料では足りないため随分助けられました。また今、卒論を控えており、参考文献を読むだけで精一杯という感じですが最終学年でもあり、一冊でも多く他の蔵書を読んで卒業したいと思っています。

最後に、学校側への要望として図書館の位置がわかりにくいこと、また気軽に利用できるように学校の正面に置いたらどうでしょう。そしてⅡ部学生のために開館時間の延長をお願いします。

人間、読まずにはいられない

短期大学国文科 2年

濱 鮎 子

人間、読まずにはいられない。不思議なものだがそうなのだ。

読みものは、以前に読んだ時には、そうでもなかったことが、今、読んでみるとそうでもあることがよくある。確かに、本は、時間的な空間を操る。この激しい時の流れを止め、別の時間へ私たちを導く。その中で、私たちの時間が、流れていく。しかし、誰もその中で過ごすことを無駄とは言わない。それは、時間の代償として、生きるエネルギーとでもいうものを与えてくれるからだ。現実から逃れさせてくれる。あるいは、現実を直

視させるものである。それが、活力となる。

エネルギー源となる本には、注入する（読む）タイミングがある。いつであるかは、先輩諸氏から学ぶとよいだろう。しかし、このタイミングが以前にそうでもなかったことを、そうでもあるようにさせる原因であろう。大切なタイミングを外すと、感動は半減し無駄になる。

人間、読まずにはいられないと言った。一人一人が、別の時間空間を漂い、エネルギーを補給するためである。私は、その人間の欲を満たしたいとする同質の結集が、図書館と言えるのではないかと思う。図書館には、運命的な出会いが、数限りなくある。人生の伴侶とする読みものが、きっと手に入るだろう。何しろ、人間、読まずにはいられないのだから。生きていく上でも、重要なことと考えてよいと思う。

としょかん

図書館について

体育学部体育学科 4年

増 田 美由紀

私が大学の図書館を利用したことがあるのは、恥ずかしい事なのですが、両手で数えることができくらいでした。本当に自分の恥をさらけ出す様ですが、1・2年の頃はほとんど図書館に訪れたことはなく3年になって、初めてテスト勉強とか卒論の為に必要な資料を調べに訪れたのです。そして4年になり時々、授業の空き時間に教員採用の勉強をちょこつとやるくらいで、私にとって図

書館とは、無縁に近いものでした。

しかし、数少なくとも図書館を訪れるたびに思うことがあります。それは、本学の図書館は地下にある為に雰囲気は少々暗く、また閲覧室も照明が充分とは言えず、環境に問題があると思います。それに図書館というどうしても本に親しみをもち、本を好きな人が利用する場合が多く、私にとってはなじみのうすいものでした。中・高校の図書館には一般書が多く、貸し出しも簡単でしたが、大学では専門書が多く貸し出しの手続きがめんどくさい、堅苦しく余計に近寄りたいたいがするのだと思います。けれど図書館は、利用するだけの価値が充分にあるので、これから少しでも機会を作って利用したいと思います。

図書館人のひとりごと

— 随想 —

図書館 関 根 廣 明

問題意識とのであい

私が現在の図書館に勤務したのは、1965年の春であつた。図書館人としての生活は、学生時代からの恩師で今は故人の阿部秀夫先生のすすめと、私個人の経緯とごく単純な動機からでもあつた。

当然のごとく図書館業務に専念し、半ば情性化した毎日であつた。当時阿部先生は、ドイツ語と倫理学の教鞭を執るかたわら図書館長をも兼務されていたので、講義の合間に姿をみせては、冗談で私達を笑わせていた。ある日のこと、冗談の中の一つの言葉が私の心をチクリと突き刺した。「君ね、大学における図書館人は、一般事務者的な職人に終始してはいけな。常に探究心を求める図書館人であってほしい。」さらに付け加えた。「常に研究目標に向かって努力をしなさい。」この言葉は、どんな名著、名言よりも私の図書館人生にたいする軌道を決かなものにしてくれた。以来、目標としての私の研究テーマを作り出すためには、さしたる長い年月を必要としなかつた。それは図書館資料の分類に関する「ひずみ現象」である。

「ひずみ現象」の概念は、人工的な作用によって変化する現象と物理的な作用によって変化する現象に大別することができる。ここでは、前者の概念に当てはまるものである。この「ひずみ現象」なるものの背景は、書架の中の図書館資料の排列のみだれ現象にその根源があるものと理解していただきたい。

図書館資料は、購入（受入れ）し、即利用できるわけではなく、一定の手順を経て利用できる仕組みになっている。この一定の手順の中は、図書館資料を注文（発注）、購入（受入れ）、整理し、

書架に排列することである。つまり、利用者のあらゆる利用要求に対応できるようにするための検索手段と利用手段を講じなければならない。そのためには、図書館資料を同一主題別、同一形式別に書架に排列する必要がある。つまりこれを一口に表現すると「分類」である。

分類は、図書館資料の利用に必要な「請求記号」の一部としてきわめて重要な機能と役割をもつものである。「請求記号」とは、一般的に「分類記号」と「図書記号」からなる。分類記号は、「日本十進分類法(Nippon Decimal Classification 一略称 N. D. C)」によって図書館資料に付与する主題番号である。図書記号は、「日本著者記号表」によって図書館資料に付与する著者の記号である。この「請求記号」が図書館資料と利用者の間の橋渡しをする役割をもつのである。

さて、この分類によって同一主題別、同一形式別に排列した図書館資料のみだれ現象を「ひずみ現象」とよぶ。このひずみ現象の発生原因は、いったいいかなる理由によるものかという問題意識にたいして「荘園制」と「ファシズム」を題材にした若干の研究課題を加えておきたい。

研究課題

1. NDC8版にもとづく荘園制に関するひずみ現象

荘園制の分類記号をNDCで検索すると、経済史上での荘園制は、332.04(中世経済史)、西洋史上での荘園制は、230.4(ヨーロッパ中世史)、日本歴史上での荘園制は、210.3(日本古代史)、法制史

上での荘園制は、322.13(日本古代法制史)に分類し、経済史、西洋史の荘園制は、それぞれ中世に時代区分し、日本歴史上と日本法制史上ではそれぞれ古代に時代区分をして用いることになっている。しかしながら日本の荘園制は、古代に成立し、発展し、崩壊したものではなく、8世紀中期以降から16世紀中ごろまでおよそ800年におよぶ荘園制の歴史を成立期、展開期、解体期に時代区分している学説も存在するのである。つまり、著者の説明、もしくは主張によっては、中世に収めて用いる場合もあり、日本荘園制に関する図書館資料は、古代史の排列位置と中世史の排列位置に分割した排列現象になりうる。これは、明らかに分類のみだれもしくは分類のくいちがい現象（ひずみ現象）である。

2. NDC8版にもとづくファシズムに関するひずみ現象

ファシズムの分類記号をNDCで検索すると、309.8ファシズムと311.8全体主義（ファシズム）に収めて用いることになっている。しかしながら、ファシズムの概念を明記していないNDC8版では、同一主題、同一形式の図書資料が分類担当者の裁量で社会思想のファシズムに分類したり、政治学のファシズムに分類することもありうる。つまり同一主題、同一形式の図書資料が分割した排列現象になりうる。これも明らかに分類のひずみ現象である。かくして、図書館資料の排列のみだれに起因する研究課題とその若干の説明を付け加えたしだいである。

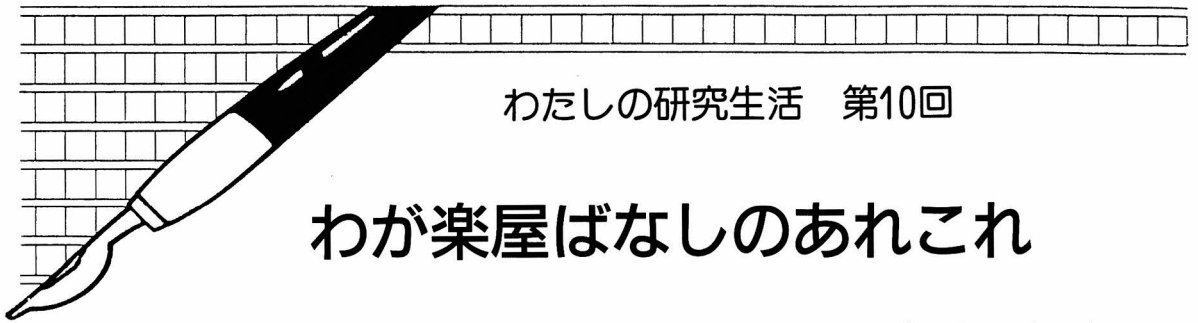
む す び

図書館は、情報を蓄積し、提供する場であり、書架には、たくさんの情報源になる図書館資料が排列されている。収集された図書館資料は、いかなる情報検索にも対応できる仕組みになっていなければならない。しかしながら図書館資料の排列のみだれ現象（ひずみ現象）を防止する手段なくしては、たとえコンピュータ検索に移行したとし

てもじゅうぶんなる情報伝達もしくは、情報検索を期待することはできない。したがって、図書館資料の排列の根源になるNDCの分類項目の概念を理論的に明確にコード化することは、きわめてたいせつである。以上、標題に即して述べた次第であるが、きわめて雑文であり、的をはずれた内容になり、はたして、一図書館人の研究は、いかなる成果が期待できるものか若干、不安な今日このごろである。

さらに今、図書館人は、出版情報と情報化社会を結ぶ大きなメディアとしての役割意識を持つ必要があり、これからの図書館人は、特定の専門分野の情報ニーズに対応できるだけの力量を持たなければならないと自問している今日このごろでもある。

おわりに、私は、冬山でスキーをすることが唯一の楽しみである。急斜面のコブとコブを滑る時は、前方へ飛ばされる危険を防ぐために、両膝をガッチリ抱え込んで、グレンテ・シュブング（雪面のコブとコブの間を飛びこえて滑走すること）する。まさに膨大な情報量と出版量に飛ばされる危険を防止するために、図書館人は、ガッチリと目標意識と役割意識というブロッキング（抱え込み動作）が必要ではないだろうか。そして、情報化社会というコブのある急斜面を滑るためには、しっかりしたブロッキング（抱え込み動作）と基本的な図書館学の知識と高度な情報図書館学の知識によってバランスを保持し、図書館人としてのみごとなシュプールを描きたいものである。こんな図書館人のひとりごとにご叱責なり、ご助言をいただければ幸甚である。



わたしの研究生活 第10回

わが楽屋ばなしのあれこれ

教養部助教授 塩谷政憲

聴く

社会学の研究方法のひとつに聴き取り調査がある。インタビューのことである。大学院生時代、私は中野卓先生の聴き取り調査にお伴したことがある。先生はそのとき、目の前にすわっておられる御老人の生活史について尋ねるべく「ひとつ一代記を話してくれませんか」と切り出した。インフォーマント（その御老人のこと）は、自分のこれまでの人生を語り、先生は「ほう、そうですか」と、あいづちを打つのみであった。インフォーマントの長い話が了えたとき、先生は私におかたて言われた。「僕は聞いたから、今度は塩谷くん、君が質問したまえ」そのとき私は……呆然としたのである。一体、何を質問してよいものか言葉に窮したのである。……質問すれば、相手は答えてはくれるであろう。しかし、その答えが真実かという些か心細い。話し手の側に主体性があるこそ、はじめて、話し手のペースのもとで真実が語られるからである。

私には、中野卓先生の聴き取り調査は名人芸としか思えなかった。その中野先生は、画一的なアンケート調査（質問紙法）については、御自身は併用しつつも、極めて懐疑的だった。もともと、アンケート法というのは、個人的な名人芸によるバラツキを克服するための手だてなのだが。

先生は、インフォーマントをして、この人にこそ自分の人生を聞いてほしいと思わせるような人格的魅力をもっておられたのだらうと思う。予断

をもつことなく相手に接し、おのれを虚しくして相手の心に耳を傾ける人格を研ぎあげた人だからである。しかし、このことは、自己自身の人間観世界観の変容をもおそれないということなのである。私には、とてもそのような度胸はなく、あらかじめ反説でもってガードを固めておかないと気持ちが落ちつかないのである。研究者として、まことに情ないことだと思う。

読む

このことは、私の本の読み方についていえるようだ。著者の論旨の全体像を虚心坦懐に受けとるよりも、自分の関心が先に立って、なにやら性急な気分で、いわば使えそうな部分を探し出すような読み方なのである。だから傍線を引きつつ読むということになる。ただしカードは作らない。カードシステムは多量に蓄積してこそ威力を発揮するものであり、しかし私には丹念にカードを蓄積していく辛抱強さに欠けているのである。カードしなければ忘れてしまうような事なら忘れてしまえと私は観念している。そこで傍線を引く。いったいに社会科学の文章は、各パラグラフに必ずキーセンテンスがあり、もしもないならば、著者の考えが十分に整理されていないくだらぬ内容だと決めつけることにしている。この傍線を引きつつ読むという私のやり方は、良く言えば目的をもって読むということだが、ありようは、おいしい部分のつまみぐいということである。近年、この傾向がはなはだしく、このところ人間観の変容

をせまられるような、魂が揺さぶられるような読書体験から遠ざかっているのは、このせいかなと思う。

考える

社会学の実証的な研究については、ひとつの主題をめぐっては、せいぜい二つか三つの概念（専門用語と解してよい）を用いて説明するのが妥当なところだろうと思う。社会学者のあつかう社会事象はごくありふれた身近なことが多いし、たくさん概念を並べたてたところで、うさんくさいだけのことである。だから最少限の概念を用いて現実をスッキリと明確化する。これこそカオス（無秩序な現実）のなかに秩序を創り出すことで、これほどの法悦はない。しかしまた、と思う。概念化は事実を照し出し浮き立たせることであるが、四捨五入することでもある。切り捨てられた様々な事実のむれをすくいあげるような新しい概念づくりをとらえるもの、私がこれまでにやってきた仕事は既成の概念の援用でしかなかった。才乏しき私には、それが精一杯のところかもしれない。

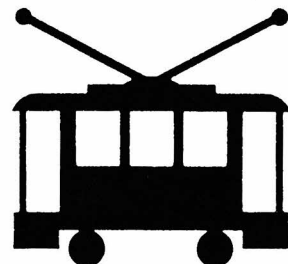
書く

文学者S氏は、一日に400字の原稿用紙に三枚だけを書き、これを毎日続けたという。たとえばどんなに落ちこんでいようと一日に三枚。逆にどんなに気分が高揚していようと決して三枚をこえることはなかったという。あたかも熟練した職人が毎日一枚一枚せんべいを焼きあげていくような仕事ぶり、これこそがプロのやり方というべきなのであろう。悲しいかな私にはこれができない。一体、S氏には体質的に、ときにはふさぎこんだり、あるいは異様に気分が高ぶったりすることがないのであろうか。私の場合は、それこそ一気呵成に書きあげる。社会学の論文は、ほぼ40枚でもって意を尽くすべきだというのが森岡清美先生の教えであった。この40枚を私は二日か三日の緊張のもとで書き上げる。ただ、この緊張の、二・三日まで気持が高まるまでの日々がまことに

長いのである。無論、書くことを忘れているわけではない。いつも頭のすみのどこかにその主題において暖めつけ、もうそろそろ自分の想念を世に出してやろうかなと思うとき、執筆への動機づけが一挙に高まるのである。そのときには既に、書き出しの文章と結語とは、反芻のすえ暗誦するまでに至っているのである。

楽しむ

私の大学までの通勤時間は片道三時間の余。往復では七時間に近い。しかしこの時間こそ、決して電話のかかってくることのない、子供がひざによじのぼってくることのないステキな時間帯なのである。私にとって東海道線と小田急線の車中は、思索と読書の場であり、さらには執筆と飲食と妄想の時でもある。私の友人Kは、電車の中でこそ執筆がはかどるのだという。書斎なればついつい原典にあたったり、資料の再検討が始まって迷いが生じるのだが、車中ならば、ただひたすら書きすすめるを得ないからだという。なるほどそういうことかなと思う。実は、私のこの一文自体も、快適なる小田急線の車中で書いているのであるから。車中ならば、ただひたすら自分の想念とつきあっていればよく、原典にあたったり、典拠を示したりする作業は後からでまにあうのだ。だからつくづくと思う。環境が整っていることにこしたことはないけれども、整わざるところにも効用というものはあるのだろうと。



図書館運営委員会について

昭和60年度1回目の図書館運営委員会が、6月24日13時から図書館共同研究室で開催された。委員会は各学部、教養部、短期大学から選ばれた各1名の委員と図書館長の9名で構成されるが、今年度は昨年度来の委員が6名、新委員が3名（1名は図書館長）で交代の少ない年であった。委員会出席者は8名、それに事務長等2名が参考人として列席し、図書館長を議長として開かれた。

まず最初に図書館長の、規定整備委員会の答申を受けての図書館諸規定の整備の促進、大学のレベルアップと図書館との関係、図書館運営に対する委員会の重要性と期待等を内容とした挨拶の後に議事にはいった。

ここでは、図書館備え付けの主として学生向け図書の名学部等よりの推薦について話し合わせ、次に、図書館の現状について図書館側から報告があった。特に図書館予算のうちここ数年来の図書資料費の急激な減少、収容力の極限状態に立ち至って機能停止寸前にある書庫問題について討議がなされた。また図書館資料の選択、本学における情報収集と電子計算機との関係等についても話し合いが行われ、14時40分、閉会した。

（松沢）

編集後記

「松陰」も10号を発行することになりました。今回は10号を記念して、利用者である学生の皆さんの、図書館に対する意見・感想を寄せて頂き、特集してみました。いかがでしょうか。

神島 二郎（ひがししま）大7. 4.18生。政治学者。国士館中学を昭和11年3月に卒業。このとき寄書に諸葛亮の座右銘「謹慎」を書く。一高を経て、東大政治学科を昭和22年に卒える。国会図書館立法考查局・明大短期大学部講師を歴任して、昭和34年立教大学教授。昭和48年には法学部長に就任。昭和55年に日本政治学会理事長となる。丸山真男の政治学と柳田国男の民俗学とをともに“神島学”を創出したという。

著作が非常に多いので、単行本のみ掲げる。

『近代日本の精神構造』（岩波書店 昭36）『日本人の結婚観』（筑摩書房 昭39）『権力の思想』（筑摩書房 昭40）『近代化の精神構造』（評論社 昭43）『文明の考現学』（東大出版会 昭46）『国家目標の発見』（中央公論社 昭47）『常民の政治学』（伝統と現代社 昭47）『柳田国男研究』（筑摩書房 昭48 編集）『シンポジウム柳田国男』（日本放送出版協会 昭48 共編）『柳田国男』（中央公論社 昭49 責任編集）『『天皇制』論集』（三一書房 昭49 共編）

『日本人の発想』（講談社 昭50）『人心の政治学』（評論社 昭52）『政治の世界』（朝日新聞社 昭52）

『日本人と法』（ぎょうせい 昭53 共編）『天皇制の政治構造』（三一書房 昭53）『徳富蘇峰集』（筑摩書房 昭53 編集）『政治をみる眼』（日本放送出版協会 昭54）『日本人の地方自治論』（公務職員研修協会 昭56 共著）『磁場の政治学』（岩波書店 昭57）『日常性の政治学』（筑摩書房 昭57）

（渡辺）